５．６　八幡の南画家

南画とは、中国の元、明時代に「南宗画」と呼ばれた絵画様式が、江戸時代に日本へ伝わり「南画」と言う名で発展したものである。中国では、江南の穏やかな山水を柔らかく描く「南宗画」と河北の荒涼とした風景を厳格に描く「北宗画」があり、また描く人物によって「職業画」と「文人画」と区別されていた。

「文人画」は教養を備えた士大夫や高級官僚、隠棲生活を送る事の出来た裕福な人々であり、絵を描くことは教養の一部である。この画き方の違いを表現する「南宗画」と、描いた人物の立場を表す「文人画」が結びつき日本に入って来たときには「南宗画」＝「文人画」となっていた。このため、日本での「南画家」は南宗画と北宗画と両方を学び、職業として描いても精神的に文人と言うことで「文人画家」と言われた。

江戸後期に生まれた山本梅荘（やまもとばいそう）（弘化 3 年～大正 10 年、1846～1921）、出身地は碧海郡新川鶴ケ崎村、幕末頃半田の山本公平（書画骨董商）の養子になる。その後独学で絵画の習得に励み京に出て、貫名海屋、三谷雪えんに学び、明治 15 年（1882 年）に「第 1 回内国絵画共進会」で金牌を受賞するほどになり、南宗水墨画では当時梅荘に及ぶ者はいないとまで言われた。文展の審査員、宮内省御用掛を拝命するなど活躍した。

その弟子の中の八幡村出身者を調べると

＊ 平松梅洲（ひらまつばいしゅう）（明治 17 年～大正 3 年、1884～1914）
　知多郡八幡村中島の農家の生まれ、本名三郎。生まれながら片目が不自由にもかかわらず、少年の頃より画家を志し、山本梅荘の指導を受け、村民に教えるようになった。後に早川梅亭を山本梅荘に、久野柳荘を山本石荘（梅荘の長男）に紹介するなど地域の南画の発展に尽力した。

＊ 尾之内半農（おのうちはんのう）（生没年不詳）
　知多郡八幡村小根の元造り酒屋の子として生まれた。後に半田市に二年ほど住み山本石荘について学ぶ。画の他に茶・花の先生をしたこともある。

＊ 久野柳荘（くのりゅうそう）（明治 20 年～昭和 48 年、1887～1973）
　知多郡八幡村、伊藤家に生まれ林太郎と呼ばれていた。子供の頃から絵画に興味があり、同村の尾之内半農に絵を習った。小学校卒業後海軍に入隊、除隊後上京し小室翠雲に半年ほど学んだが帰郷した。同村の平松梅州の紹介で山本石荘の門人となる。住み込みで修行に励み、石荘の父梅荘の側近もつとめた。後に久野と改姓、温厚篤実な人物で小野寺梅丘と最も親しかったという。

＊ 早川梅亭（はやかわばいてい）（明治 11 年～昭和 36、1878～1961）

知多郡高横須賀村、加藤小助の 3 男として生まれた。通称は丈太郎、愛知一中（現県立旭丘高校）3 年の時、母の実家である知多郡八幡村中島の早川家の養子となる。愛知一中は病気のため中退、25 歳のとき山本梅荘に師事しその後子息の石荘につき、画会に出品し受賞、宮内省お買い上げになった作品もあった。几帳面な性格で大正の中頃には八幡村の村長もつとめた。

＊ 杉江有昌（すぎえゆうしょう）1897～1940（明治 30 年～昭和 15 年）

農業杉江文太郎の長男。知多郡八幡村中島に生まれる。尋常高等小学校卒業後、八幡農業補習学校に通うかたわら山本石荘・香雲、立松翠濤に画を学ぶ。後に、久野柳荘の門人となり、芳月と号する。第３回東洋美術院で特選を受賞し、小川鴻城の門に入る。昭和 10 年、画号を有昌と改める。東海美術展や名古屋市美術展に入選するなど中京画壇で活躍した。

＊中村梅庭（なかむらばいてい）1910～1991（明治 43 年～平成 3 年）

愛知県に生まれる。画を毛利梅友に師事し、山本梅逸を慕った。山水・花鳥を得意として、日本南画院に入選した後は無所属で活動する。菁々会、竹影会の会長をつとめる。晩年は知多市つつじが丘四丁目に移り、制作活動をした。

この他にも、山本梅荘一門ではないが、知多八幡出身の南画家がいる。

＊ 神原鳳章斎（かんばらほうしょうさい）（生年不詳～嘉永 7 年、？～1854）

知多郡中島村、早川孫右衛門の二男として生まれた。幼いころから作画に熱心であり、作品を近隣の人に売って家計の足しにしたという。後に犬山の神原家の養子となり、犬山城主成瀬正住に仕え犬山で亡くなっている。師匠は定かではないが、犬山、知多市内にも多くの作品が残っている。八幡の天白社では天井画を見ることができる。

八幡神社の祭礼で使用される中島地区の屋形の油単は鳳章斎の作品といわれている。

＊ 冨田古観（とみたこかん）1750 頃～1832（寛延 3 年頃～天保 3 年）

知多郡古見村（現　知多市新知）の旧家冨田忠左衛門の男子として生まれた。幼い頃より画を好み、巧みに描いた。この地方を訪れた帳月樵を招いて画の教えを受けた。画家を生業としていたわけではないが、近辺に多くの作品が残されている。

以上が主だって活躍された八幡村ゆかりの方々である。年代でみれば明治時代に集中している。尾張の南画は天明年間に第一期をむかえ明治時代に第四期をむかえているが、なぜこの時期に多くの作者が誕生したのだろうか。推測の域を出ないが、八幡村の生活の安定があり、山本梅荘とその一門が近郊に住み、村内に、平松梅洲のような人と人を結びつけるに労をいとわない人物が居たことなど、さまざまな要因が絡み合って、多くの作品が残された。

【服部徳次郎著：愛知画家名鑑より】